

知覚的特性・感覚的特性・美的特性

N.ハンフリーの進化心理学的仮説に依拠して

松崎俊之

Perceptual Properties, Sensational Properties, and Aesthetic Properties Based on N. Humphrey's Evolutionary Psychological Hypothesis

Toshiyuki MATSUZAKI

0 はじめに

本稿において主題的に取り上げるのは、知覚的特性と美的特性とがいかなる関係にあるかという問題であるが、知覚的特性と美的特性との関係に関する理解を20世紀後半から今日にいたる英語圏の美学、いわゆる分析美学の潮流のうちに探ってみるならば、分析美学の伝統においては、知覚的特性と美的特性との関係について、両者を別個の特性と見なす立場がその主流をなしていると言える¹⁾。

これに対し、わたしはこれまで、こうした主流をなす理解から一步距離を置いて、知覚的特性と美的特性との関係について独自の観点から考察をおこなってきた。ここで両特性の関係をめぐる私のこれまでの取り組みを簡単に振り返っておくならば、それは以下のようなになる。

松崎 [2010] おいて私は、美的特性一般を、物理的特性という非美的特性を基盤としてそこから直接的に創発する「一次的美的特性 (the first-order aesthetic properties)」と、一次的美的特性が当該参照枠のもとに位置づけられることによって成立する「高階美的特性 (the higher-order aesthetic properties)」とに大きく二分して捉える美的特性に関する階層構造理論の基本骨子を呈示したのであるが、そこでは一次的美的特性と知覚的特性との関係について「一次的美的特性は知覚的特性 (perceptual properties) と不可分の一如体としてある」(松崎 [2010]: 24) という暫定的な理解を示す

にとどまった。

一方松崎 [2013] では、この一次的美的特性と知覚的特性との関係についてさらに一步踏み込んだかたちでこれを主題的に取り上げ、廣松渉の表情理論をひとつの手掛かりとして、知覚的特性と美的特性との関係をあらたに捉え返す試みを示した。そこから得られた成果の要点を示すならば以下のようなになる。

廣松の表情理論を美的特性理論のための基盤に据えることで、あらためて知覚と美的感受との関係を捉え返すとき、「広義での知覚は、狭義での知覚としての認知、美的感受、行動態勢の三契機の融合態としてある」という基本命題が得られる。

この基本命題から知覚と美的感受との関係に関して以下の二点が帰結することになる。

- (1) 広義での知覚との関係について言えば、美的感受はこの広義での知覚のもとに包摂される。
- (2) 狭義での知覚、すなわち認知との関係について言えば、美的感受は認知と融合相にある。

また、上記の二点を知覚的特性と美的特性との関係という側面から捉え直すとするならば、それは以下のようなになる。

- (1) a 広義での知覚的特性との関係について言えば、美的特性はこの広義での知覚的特性のもとに包摂される。
- (2) a 狭義での知覚的特性、すなわち認知的特性との関係について言えば、美的特性は認知的特性と融合相にある。

知覚的特性と一次的美的特性との関係に関する上記の理解をもとに、最終的に松崎 [2013] では、知覚的特性と一次的美的特性との両者を同一特性のもつ二つのアスペクトとして捉えることも可能であると結論づけた。

本稿においては、一次的美的特性と知覚的特性との関係について、松崎 [2013] とはまた別の角度からアプローチを試み、イギリスの進化心理学者ニコラス・ハンフリー (1943-) が提唱する進化心理学上の仮説にもとづく感覚・知覚理論に依拠することで、両特性の関係について進化心理学の観点から検討を加えることにする。

1 感覚と知覚に関するハンフリーの議論の検討

感覚と知覚について論ずるにあたってハンフリーは、まず両者の関係に関する従来の常識的理解の基本構制を確認したうえで、それに対する対抗理論として感覚と知覚に関する自己の理解を呈示する。そこで本章では、ハンフリーのこうした議論立てに即して、まずはハンフリーの捉える感覚と知覚に関する常識的理解について確認し (1.1)、そのうえでハンフリーの感覚と知覚に関する理解について検討を加えることにする (1.2)。

1.1 感覚と知覚に関する常識的理解

ハンフリーは、その著『赤を見る』(2006)において、『人間の知的能力に関する試論 (*Essays on the Intellectual Powers of Man*)』(1785)におけるトマス・リードの所論²⁾に依拠して、感覚と知覚との関係に関する常識的理解の基本的枠組みを再構成して示している。

ハンフリーによれば、感覚と知覚との関係に関する常識的理解にあっては感覚と知覚の間に以下のような連鎖関係が認められることになる (42/51³⁾)。

- (1)外界の対象 a が感覚器官 a' に刺激を送る。
- (2)主体 S は、この感覚刺激のある種の低次元の複製 (low-level copy) として感覚 b を生み出す。
- (3)主体 S は、その感覚のもつ諸特性 (properties) を読み取る。

この感覚の読み取り作用こそまさに感覚の意識化、すなわち感覚を感じること (the feeling of sensation) にあたるが、意識化される、もしくは感じられることによってはじめて感覚は真に感覚の名に値するものになるとするならば、(2)の段階で問題となる「感覚 b」は厳密に言うならば、いまだ感覚ではないということになる。この点に鑑みるならば、ここでの「感覚 b」はむしろ「原感覚」(proto-sensation) と呼ぶのが相応しいのかもしれない。

(4)最後に主体 S は、読み取った結果を外界の諸事実を再構成する (reconstruct) ための基盤として用いる。

この最後の過程こそまさに外界の対象を知覚することに他ならない。すなわち、知覚とは外界の諸事実を再構成する作用を意味するのであり、再構成にあたってその素材となるものが感覚であると言えるのである。なお、この段階は「無意識の推論 (unconscious inference)」にもとづくものと見なされる⁴⁾。

1.2 感覚と知覚に関する代替モデル

ハンフリーは、感覚と知覚との関係をめぐった従来の常識的理解を斥け、これに代わるものとしてあらたなモデルを提出するのであるが、その概要を箇条書きに示すならば、以下ようになる (50-1/58-9)。

- (1)外界の対象 a が感覚器官 a' に刺激を送る。
- (2)主体 S は、その刺激に対する能動的反応—すなわち、個人的な評価的反応 (personal evaluative response) として感覚 b を生み出すが⁵⁾、この反応は刺激の複製となるべく仕組まれてはいない。しかし、感覚 b が特定の刺激に対する主体 S の反応であるかぎりにおいて、それは①物理的出来事としてその刺激がいかなるものであるかという点と、②主体 S がそれについてどう感じているかという二つの点で、その刺激に関して豊かな情報を潜在的 (potentially) に⁶⁾含んでいる。

ハンフリーはここで、刺激に関して感覚が潜在的に含む一方の情報として「物理的出来事としてその

刺激がいかなるものであるか (what the stimulus is as a physical event)」という点を挙げているが、このなかの「物理的出来事として」という箇所はミスリーディングな記述であると考えられる。なぜならば、本来感覚に「その感覚を引き起こした刺激がひとつの物理的出来事である」という情報が含まれることはないからである。この点を勘案するならば、刺激に関して感覚が潜在的に含む一方の情報は、より精確には、「外界から刺激される⁷⁾ことで自分に何が起きているか (what is happening to me by externally stimulating)」という記述のもとに捉えるのが妥当であると考えられる⁸⁾。

(3)感覚bが具えるこれら二種の情報の主体Sによる読み取り (感覚の意識化=感覚を感じる) が外界の知覚を形成する原材料 (the raw material) として用いられることはない。

(4)知覚にはこれとはまったく別個に、やはり刺激から始まる独自の経路がある⁹⁾。

あらためて言うまでもなく、この代替モデルの要点は、感覚と知覚との関係をめぐる常識的理解に見られるように、感覚と知覚とを同一経路における連鎖関係のもとに捉えるのではなく、感覚を知覚から切り離し、両者を相互に独立した別個の経路のうちに位置づける点にある¹⁰⁾。

1.3 純粹認知としての「盲視」をとおしての知覚に関する理解

上に見たようにハンフリーは、感覚と知覚との関係をめぐる従来の常識的理解を斥け、これに代わるものとしてあらたなモデルを提出するのであるが、感覚と知覚をめぐる常識的理解を斥けるにあたって、常識的理解に対するもっとも強力な反証をなすとハンフリーが考えるのが、いわゆる「盲視 (blindsight)」¹¹⁾の存在である。そこで本節では、この盲視についてハンフリーの感覚・知覚理論との関連において検討を加えることにしたい。

1.3.1 盲視

盲視というこの特異な知覚様態を視覚的経験の構成要素に即して捉えるならば、盲視とは、感覚が発

生せず、その結果感覚の意識も生じないが、外界の知覚は無事な状態であるということになる (52/61)。

ハンフリーが盲視状態を発見するきっかけとなったのは、外科手術によって後頭部の大脳皮質第一次視覚野 (V1) を取り除かれた「ヘレン」という名の雌ザルの存在であった。第一次視覚野 (V1) を欠いている以上ヘレンは本来「盲目」であるはずだが、それにもかかわらずある種の訓練をとおして、場合によっては、障害物だらけの部屋を駆け回り、床からパンのかけらを拾い上げることさえできるようになった。しかしながら、この盲視のサル「ヘレン」は、自分の目が見えるとはまったく信じていないように見受けられた (43-5/52-4)¹²⁾。

自己の経験について報告することのできないヘレンを観察するだけでは、盲視の状態がいかなるものであるかをその当事者の経験に即して解明することは不可能であったが、その後一次視覚野 (V1) に損傷を受けた人間の患者の事例からこの点が徐々に明らかにされることとなった。

一般に盲視患者は、自分が盲目だと信じており、何の視覚的感覚もないと報告するが、それでも、物の位置やかたち、さらには色さえ推測することができる (47/55)¹³⁾。このことから推断するに、盲視は一種の「無意識的視覚 (unconscious vision)」であると考えられる (47/55)¹⁴⁾。

盲視の存在は、視覚的知覚が必ずしも感覚 (とその意識) をともなう必要がないということを裏づける極めて強力な証拠となる (47/56)。すなわち感覚と知覚は、同一の出来事 (刺激事象) によって引き起こされるとはいえ、その出来事に対するそれぞれ別個の反応であり、順番にはなく並行して生起するものと考えられるのである (49-50/58)¹⁵⁾。

1.3.2 純粹認知としての「盲視」

以上のことから明らかなように、盲視とは感覚から切り離された知覚であると言えるが、まさにその意味で、盲視を「純粹認知としての知覚 (perception as pure cognition)」と見なすことができる。

盲視をこのように純粹認知としての知覚のモデル

として受け取るとするならば、そこから純粹認知としての知覚について、「純粹認知としての知覚とは、外界の対象がもたらす刺激から情報を取得し、それをもとに外界の諸事実を再構成する作用である」とまずは暫定的に定義づけることが可能となる¹⁶⁾。

1.4 進化心理学上の仮説にもとづく感覚と知覚に関する理解

ハンフリーはその著『赤を見る』において、進化心理学上のひとつの仮説を設定し、それをもとに感覚と知覚の発生について論ずるのであるが(ただし、そこでの彼の主たる関心事はあくまで感覚にあり、知覚に関してはその発生メカニズムについて触れるにとどまっている)、そこでの議論は、ハンフリーがあらたに呈示する感覚と知覚に関する代替モデルを進化心理学的な観点から補完するものであると同時に、感覚とはいかなる存在であるのか、その本質的な在り方を究明するものともなっている。そこで以下では、ハンフリーの仮説を再構成しながらつぶさに検討することで、彼の感覚理論の全体像を捉え、それをもとにハンフリーの感覚に関する理解を詳らかにしたい。

感覚と知覚の発生をめぐってハンフリーが繰り返し広げる進化心理学上の仮説は、原始的なアメーバから始まり人間で終わるひとつの壮大な物語であると言えるが(84/95)、まずはその進化の過程をひとつずつ順を追って押さえておくことにしよう。

1 中枢神経系をもたない原始的な生物(アメーバ) (85/96-7)

この原始的な生物は自己と外界とを明確に分かつ構造的な境界(a structural boundary)を具えており、この境界を挟んでその内外で物質とエネルギーの交換をおこなっている。その体表ではさまざまな出来事が生ずるが、この生物が生き延びるためには、よいものと悪いものとを区別し、それぞれに対応しい反応をする能力を進化させる必要がある。この生物にとって、そうした外界からの刺激に対する反応である「身悶え(wriggle)」は、刺激を受けた場所のすぐ周辺で組織された完全に局在的な反応と

してある¹⁷⁾。

II 中枢神経系を備えた生物

(1)やがて反射弓¹⁸⁾のようなものが発達すると、外界からの刺激は中央の神経節(central ganglion)や原始的な脳(proto-brain)を経由するようになる(85/97)。

(2)さらに、化学物質を感知するものや光を感知するものなどの感覚領域(sensory areas)が分化し始め、それによってそれぞれの刺激に応じた反応(身悶え)をするようになる¹⁹⁾。こうした反応(身悶え)が「感覚(sensation)」の原型であると言えるが²⁰⁾、この原始的な生き物のなかではこうした感覚的な反応はいまだ反応以外の何ものでもなく、受容もしくは拒絶の身悶え(wriggles of acceptance or rejection)に過ぎない(87/97-8)²¹⁾。

(3)この生物の生活が複雑になるにつれ、自分に働きかけてくる(affect)ものについてある種の内的知識(inner knowledge)をもっていたほうが有利になる。この生物は、その知識をより洗練された計画や意志決定(decision)をおこなうための基盤として利用するのである。こうした内的知識を得るには、体表に与えられる刺激の心的表象(mental representation)を形作る能力が必要とされる(87/98)。

この能力を発達させるには、感覚器官から入ってくる情報を一から分析し直すところから始めるというのもひとつの手かもしれないが、しかしそれでは効率が悪い。というのも、どこでその刺激が発生しているか、その刺激はどんな種類のものなのか、それにどう対処すべきかといった刺激に関する必要とされる詳細な情報のすべては、この生物が適切な感覚反応(appropriate sensory response)をおこなうときに発する指令信号(command signal)のなかにすでにコード化されている(encoded)からである。したがってこの生物が①「何が起きているか(what is happening)」ということはもとより、②「それについて自分がどう感じているか(how it [=the animal] feels about it [=what is happening])」²²⁾ということさえ発見するには、自らがそれについてどのようにしているかをモニターしさえ

すればそれで済むのである (87/98)²³⁾。

主体が自分自身の反応をモニターする、すなわち自己モニタリング (self-monitoring) というまさにこの作用こそ「感覚を感じること (feeling sensation)」の原型であると言える (90/102)。

感覚とは本来「意識化された感覚」を意味するものである (逆に言うならば、意識化されない感覚は語の正しい意味での「感覚」ではない) とするならば、感覚反応のこうした自己モニタリングは感覚反応の意識化として捉え返すことも可能であることから、この段階にいたってはじめて本来の意味で感覚の原型が形成されたものと見なされることになる。

(4)とはいえ、体表に与えられる刺激の心的表象を形成するにとどまらず、その (外界からの) 刺激をもとに外界の状況を再構成することができたとするならば、その生存価 (survival value) は一層高まるものと考えられる (90-1/102)²⁴⁾。

しかしながら、「自分に局在的に何が起きているか (what is happening locally to me?)」という問いのもとでの答えが、質的で (qualitative)、現在時制で (present-tense)、一過性で (transient)、主観的 (subjective) なものであるのに対し、「外界で何が起きているか (what is happening out there in the world?)」という問いのもとでの答えは、量的で (quantitative)、分析的で (analytical)、恒久的で (permanent)、客観的 (objective) なものなのであるということからも明らかのように、刺激の心的表象を形成することと刺激をもとに外界の状況を再構成することとは、まったく異なった作用であると言える (91-2/102-3)。

したがって外界の状況を再構成するには、すでにもっていた原始的な経路とは別個の処理経路 (processing channel)、今回は感覚器官から入ってくる情報を一から分析することを始める新しい経路を発達させる必要が生ずる (92/103)。

古いほうの経路は、刺激がその生物それ自体に対して何をしているかについて、情緒負荷的 (affect-laden)、それぞれの感覚様相に特有の (modality-specific)、身体を中心とした (body-centered) 描像を提供し続けるのに対し、あらたな

経路は、外界についてより中立的 (neutral)、抽象的で (abstract)、身体から独立した (body-independent) 表象を提供するようにできている (92/103)。

あらためて言うまでもなく、この第二のあらたな経路が他ならぬ知覚の原型 (the prototype of perception) であると言えるが、この段階以降、感覚と知覚は相対的に独立した道筋を辿って進化することになったと考えられる (92/103)。

(5)この生物が進化を続け、間近の環境からの独立性を高めるにつれ、体表への刺激そのものに直接反応し続けることから利益を得る必要はますます少なくなってゆき (92/103)、最終的には、長い進化の過程のなかで感覚的な活動がまるごと「私秘化される (privatized)」ことになる (94/105)。

すなわち、ある身体部位である特定の感覚的な反応を命ずる、換言すれば、ある特定の「身悶え」をせよと命ずる指令信号 (the command signals) が体表にいたる前に短絡し、刺激を受けた末端の部位まで達する代わりに、いまや感覚入力経路上の中枢神経系により近接した部位にのみ達することとなり、ついにはこのプロセス全体が脳内の内部ループ (an internal loop in the brain) と化すことで外界から遮断されることになるのである (94/105)。

このとき「身悶え」という感覚的反応は疑似化 (ヴァーチャル化) し、一種の行動態勢 (すなわちある行動が発現するにあたって必要とされる心身的な「構え」、「姿勢」、あるいは別言するならば、行動に向かう潜在的可能性としての傾性・性向 [propensity]) と化す²⁵⁾。

一方、脳内で内部ループ化した指令信号の自己モニタリングが感覚であるということになる²⁶⁾。

1.5 感覚と知覚の混同

以上見てきたように、ハンフリーによれば、感覚と知覚は本来進化論上の生存価を異にする、相互に独立した別個の経路のうちに位置づけられるものと言えるのであるが、両者はある特有の仕方ですら「混同 (confusion)」され、その結果として、外界に位置する知覚対象がある特定のクオリアを帯びた相で立

ち現われてくることになる。

ハンフリーによれば、この種の混同の事実を最初に指摘し、しかもその成立機序に関してもある一定の説明を与えたのは、トマス・リードということになる(60/69-70)。リードはこの点に関して、その著『人間の知的能力に関する試論』において以下のように述べている。

知覚とそれに呼応する感覚は、同時に生み出される。われわれの経験においては、両者を別々に見出すことは決してない。それゆえわれわれは、両者を一体と見なし、それらにひとつの名称を与え、それぞれが具える異なった属性 (attributes) を混同する (confound) ようになる。両者を思考において区別し、その一方にのみ注意を向け、他方に属するものに何もかも帰属しないことは非常に困難となる。(Reid [1786]: 295)

すなわちリードによれば、感覚と知覚の混同は、両者がつねに同時に生起するとき、そこに一種の連合関係 (associative relation) が成立すること起因するものと見なされるのである (cf. 60/70)²⁷⁾。

感覚と知覚の混同に関するこのリードの記述は、たしかにそうした現象に対する一応の説明とはなっているが、しかし感覚と知覚の混同の原因を両者がつねに同時に生ずる点に求めるだけで問題がすべて解決されるわけではない (cf. 61/70-1)。なぜならば、この感覚と知覚の発生と同時に由来するだけでは、本来主体の側に位置づけられる心的現象であるクオリアが、なぜ外界に位置する知覚の対象に内具する性質と見なされるのかが明らかとされないからである。

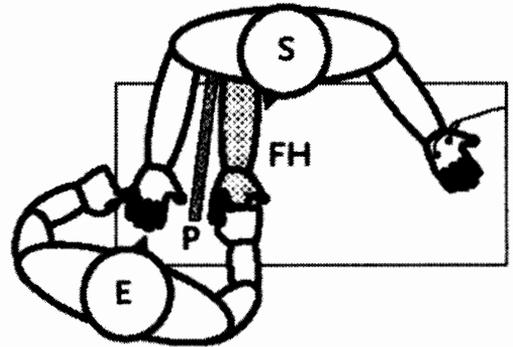
ハンフリーはこの問題を解明するにあたって重要な示唆を与えるものとして、ラマチャンドランらの実験に注目する(62-4/71-3, cf. Humphrey [2011]: 112-6/ハンフリー [2012]: 143-7)²⁸⁾。それではハンフリーの注目するラマチャンドランらの実験とはいかなるものなのか。ここでは、ハンフリーもその典拠としている Armel and Ramachandran [2003] をもとに、ラマチャンドランらの実

験²⁹⁾の概要をまずは押さえておくことにしよう。

【実験1】(62/71-2, Armel and Ramachandran [2003]: 1499r, 図1を参照)

被験者Sがテーブルに向かって座る。右手は仕切り版Pによって視界から遮断されているが、その代わりにゴム製の偽の手FHがSの目の前にはっきり見えるように置かれている。つぎに実験者Eが、Sの本物の手とゴムの偽の手を同時に軽く叩いたり撫でたりする。するとSは、その刺激に呼応する触覚的な感覚がゴムの偽の手で起きているように感じると報告する³⁰⁾。

図1 ラマチャンドランの実験1



【実験2】(62/72, Armel and Ramachandran [2003]: 1499r-1500l, 図2を参照)

より重要で、しかも驚くべき結果をもたらすのは、【実験2】である。【実験1】とは異なり、【実験2】では、ゴム製の手が被験者Sの視野にない。実験者EがSの本物の手とテーブルの上の一点を同時に軽く叩いたり撫でたりすると、Sはその刺激に呼応する触覚的な感覚をそのテーブルの上の一点で起きているように感じると報告する。

この実験結果についてラマチャンドランらは、以下のように述べている。

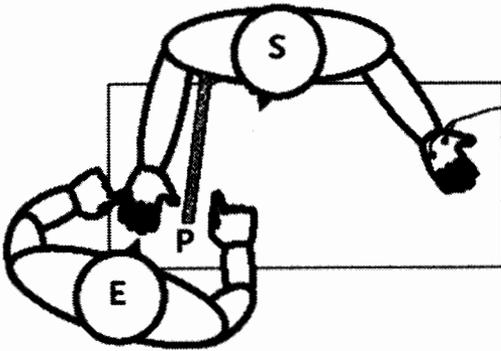
われわれは、この幻覚の背景に潜む原理がベイズ主義的な知覚学習 (Bayesian perceptual learning)³¹⁾にあること—すなわち異なった感覚モダリティに由来する二つの知覚が高い確率で共起す

るとき、それらの知覚は「統合される (bound)」ということを示唆する。手の幻覚においては、目で見た接触と感じた接触とが、その時間的な同時性 (temporal synchrony) ゆえに統合されたのである。

(Armél and Ramachandran [2003] : 1505f) ³²⁾

そしてこの統合の結果として、「感覚は解剖学的に不可能な場所にさえ投影 (project) されうるのだろう」(Armél and Ramachandran [2003] : 1499) と、彼らは結論づける³³⁾。

図2 ラマチャンドランの実験2



ラマチャンドランらのこうした理解を承けて、ハンフリーは、これを感覚と知覚との関係一般にまで拡張することで、ある感覚が示す時-空間的パターン (spatio-temporal pattern) がひとつの出来事としての知覚対象がもつ時-空間的パターンと高い相関性をもつ場合、その感覚を外界に位置する対象に投影し、それによって前者を後者に帰属させることで、それらをひとつの事象として捉えるのはむしろ理に適ったことであると考え (63/72-3, cf. Humphrey [2011] : 115-6 / ハンフリー [2012] : 146-7)。

あらためて言うまでもなく、この投影の機制により、外界に位置する知覚の対象はある特定のクオリアを帯びた相で立ち現われてくることになるのである。

2 ハンフリーの感覚・知覚理論にもとづく知覚的特性と美的特性との関係に関する考察

前章では、進化心理学上の仮説にもとづく感覚と知覚の発生に関する議論も含め、ハンフリーの感覚・知覚理論の全体像を捉える試みを示したのであるが、つぎにここでは、そこでの議論を踏まえ、ハンフリーの感覚・知覚理論をひとつの基盤として知覚的特性と美的特性との関係について考察をおこなうことにしたい。

2.1 議論展開のための基本戦略

前章における議論からも明らかのように、ハンフリーの感覚・知覚理論においては視覚がひとつのパラダイム・ケースとして設定されているのであるが、ハンフリーの感覚・知覚理論をもとに知覚的特性と美的特性との関係について考察をおこなうにあたっては、ハンフリーの所論との整合性を高めるために、各種感覚モダリティのうちとくに視覚に焦点を当てて議論を進めることにする。

さて、本稿「0 はじめに」でも指摘したように、分析美学の伝統においては知覚的特性と美的特性との関係について両者を別個の特性と見なす立場がその主流をなしていると言えるのであるが、ここではこうした立場を代表する論者としてアラン・H・ゴールドマンを取り上げ、まずは両特性に関する彼の理解を押さえたうえで、それとの対比において、ハンフリーの感覚・知覚理論に依拠する知覚的特性と美的特性との関係に関するあらたな理解を呈示することにしたい。

ゴールドマンは、『美学必携』(2009)のために寄稿した項目「美的特性」の冒頭で美的特性をその類型にしたがって大きく8つに分類し、それぞれの類型に配される美的特性のリストを掲げるのであるが、ここではそのなかの一類型「二階の知覚的特性 (second-order perceptual properties)」にとくに注目したい。

彼は、この「二階の知覚的特性」に含まれる美的特性の例として「(色や音について言われる) あざやかであること (being vivid)、または純粹である

こと (being pure)」を挙げる (Goldman [2009] : 1251, cf. Goldman [1993] : 32)。

色や音があざやかであることや純粹であることをこのようにゴールドマンは「第二階の知覚的特性」と名づけるのであるが、このことから逆に推すならば、彼がここで (暗黙のうちに) 前提としている理論構制は以下のようなものであると考えられる。

すなわち、ある対象、たとえばトマトについてそれを「赤い」と知覚することが第一階の知覚であるのに対し、その対象の帯びる赤い色を「あざやかである」と知覚することは、この第一階の知覚にもとづく第二階の知覚であると言え、したがって、第一階の知覚において問題となる特性が「第一階の知覚的特性」と呼ばれるのに対し、第二階の知覚において問題となる特性は「第二階の知覚的特性」と呼ばれることになる。ゴールドマンによれば、この第二階の知覚的特性こそ美的特性に他ならないものであることから、美的特性は知覚的特性に対して第二階の特性としてあるということになる。

こうしてゴールドマンは、狭義での知覚的特性と美的特性とを広義での知覚的特性のもとに捉える一方で、狭義での知覚的特性が第一階の特性であるのに対し、美的特性 (「あざやかさ」) は狭義での知覚的特性 (「赤さ」) に対する二階の特性であると見なすことで、その階層上の位置づけをもとに両特性を明確に区別することになる。

2.2 感覚的特性と一次的美的特性との関係

ここでは、前節に示した基本戦略のもとに、ハンフリーの感覚・知覚理論に依拠して感覚的特性と一次的美的特性との関係について考察をおこなうことにするが、本節における考察は、感覚的特性と原美的特性との関係に関する議論 (2.2.1) と、原美的特性と一次的美的特性に関する議論との二段構えで展開されることになる (2.2.2)。

2.2.1 感覚的特性と原美的特性

1.2から1.4にかけて確認した感覚に関するハンフリーの理解にもとづき、ここであらためて感覚的特性について考えてみるならば、感覚的特性 (sensa-

tional properties) とは、外界からの刺激に対する主体の能動的反応に直接的に起因するものであり、それは①「外界から刺激されることで自分に何が起きているか」という点と②「自分がそれ (=自分の身に起こっていること) をどのように感じているか」という点に関して豊かな潜在的情報を含むクオリアということになる。

因みに、この点をゴールドマンの議論と重ね合わせるならば、感覚的特性が潜在的にもつ「外界から刺激されることで自分に何が起きているか」という情報は、「赤さ」 (より精確に言うならば、「あざやかな赤さ」) という特性におおよそ対応するものと見なされる。すなわち「赤さ」とは、それを三人称的な視点から捉えるならば、ある特定の波長をもった光³⁴⁾を (局在的に) 浴びているという事態の指標となるのである³⁵⁾。

一方、感覚的特性が潜在的にもつ「自分がそれ (=自分の身に起こっていること) をどのように感じているか」という情報は、ゴールドマンの言う「あざやかさ」 (より精確に言うならば、「赤のあざやかさ」) という特性におおよそ対応するものと見なされる³⁶⁾。

感覚的特性のもつ「外界から刺激されることで自分に何が起きているか」という情報が感覚的特性を自分の身に起きている事態という対象の側面から捉えたものであるのに対し、他方の「自分がそれ (=自分の身に起こっていること) をどのように感じているか」が感覚的特性をそうした事態を感受する主体の心的 (感性的) 反応という主体的側面から捉えたものであることから明らかなように、感覚的特性のもつ①と②の側面は感覚的特性という同一事象 (すなわち「あざやかな赤」もしくは「赤のあざやかさ」) のもつ二つのアスペクトとして捉え返すこともできよう (以下感覚的特性のもつ前者のアスペクトを「アスペクト①」と、また後者のアスペクトを「アスペクト②」と呼ぶことにする)。

このように感覚的特性は二つのアスペクトをもつと考えられるのであるが、そのうちアスペクト②、すなわち「自分がそれ (=自分の身に起こっていること) をどのように感じているか」 (「赤のあざやか

さ)に焦点を当てたクオリアをここでは「原美的特性(proto-aesthetic properties)」と名づけることにする。この原美的特性は一次的美的特性それ自体ではないものの、その精髓をなすものと見なされる³⁷⁾。

2.2.2 原美的特性と一次的美的特性

上にも述べたように、原美的特性は一次的美的特性の精髓をなすとはいえ、一次的美的特性それ自体ではないと見なされるのであるが、それでは両者はいかなる点で異なるのだろうか。

結論から述べるならば、原美的特性と一次的美的特性とを分かち決定的なメルクマールとなるのは、それぞれの特性が外界の対象(たとえば「トマト」)に対する志向性を有するか否かという点であると言える。すなわち原美的特性は、感覚的特性のもつ「自分がそれ(=自分の身に起こっていること)をどのように感じているか」(「あざやかさ」、あるいはより精確に言うならば「赤のあざやかさ」というアスペクト(アスペクト②)に焦点を当てたクオリアであるかぎりにおいて、感覚的特性がそうであると同様、外界の対象(「トマト」)に対する志向性をもたないのに対し³⁸⁾、一次的美的特性は外界の対象(「トマト」)に対する志向性をもつと考えられる。別言するならば、一次的美的特性とはあくまで外界の対象(トマト)のもつ特性と言えるのである。

それでは一次的美的特性はいかにして外界の対象(トマト)に対する志向性をもつことになるのだろうか。一次的美的特性が外界の対象に対する志向性をもつことになるのは、1.5で取り上げた感覚と知覚との混同と同様の機制にもとづくものと考えられる。すなわち、一次的美的特性は原美的特性が外界に位置する知覚対象(トマト)(厳密に言うならば「純粹認知対象」。なお純粹認知〔的特性〕については後段2.3.1で論ずる)へ投影されることによって成立するのであり、そのとき一次的美的特性は外界の対象に対する志向性を具えたものとして立ち現われてくることになるのである。

以上の点を踏まえ、後段での議論(2.3.3)を先

取りして言うならば、一次的美的特性はアスペクト②の側から捉えられた感覚的特性である原美的特性と純粹認知対象が具える純粹認知的特性との融合体(「トマトのもつ〔赤の〕あざやかさ)であるということになる(因みに言えば、一次的美的特性は、ゴールドマンの言う「美的特性」におおよそ対応するものと考えられる)。

2.3 知覚的特性と一次的美的特性との関係

前節における一次的美的特性に関する理解を踏まえ、ついでここでは知覚的特性と一次的美的特性との関係について考察をおこなうことにする。

2.3.1 純粹認知的特性

1.3.2で確認したように、盲視状態をひとつのモデルとする純粹認知は、知覚作用の中核に位置づけられるものと見なされるが、この純粹認知によって取得された外界の対象のもつ特性を、ここでは「純粹認知特性(pure cognitive properties)」と名づけることにする。

1.3.1における盲視状態に関する記述から、純粹認知特性の内実とは、物の位置やかたち、さらには色に関する情報のような、外界からの刺激から取得された、外界を再構成するために必要とされるさまざまな情報であるということになる。

盲視状態においては、感覚が発生せず、その結果感覚の意識も生じないことから推断されるように、純粹認知特性は一切のクオリア(たとえば「あざやかな赤」という現象的特性)を欠くものの、外界の対象に対する志向性は具えるものと言える。

2.3.2 狭義での知覚的特性と広義での知覚的特性

ついでここではハンフリーの所論を踏まえて知覚的特性(perceptual properties)について考えてみることにしたい。

知覚的特性に関するわれわれの一般的理解にしたがうならば、その基本的特徴としては、それが外界の対象に対する志向性を具えるとともにクオリアも具えるという点が挙げられる。あらためて言うまでもなく、知覚的特性は、外界の対象に対する志向性

を具えるという点では純粹認知的特性と共通するものの、たんにそれだけにとどまらず、あわせてクオリアを具えるという点では純粹認知的特性とは異なる。

それでは、こうした基本的特徴をもつ知覚的特性はいかにして成立するのであろうか。ここでは、知覚的特性一般を大きく「狭義での知覚的特性」と「広義での知覚的特性」とに二分したうえで、それぞれについて、先に導入した「感覺的特性」、「純粹認知的特性」、「投影」という三つの概念装置をもとに、その成立機序について説明を試みることにしたい。

(1) 狭義での知覚的特性

2.2.1に指摘したように、感覺的特性は「外界から刺激されることで自分に何が起きているか」（「あざやかな赤さ」）というアスペクト①と「自分がそれ（＝自分の身に起こっていること）をどのように感じているか」（「赤のあざやかさ」）というアスペクト②との二つのアスペクトを具えるのであるが、このうち前者のアスペクト①（「あざやかな赤さ」）を外界に位置する純粹認知対象（トマト）に投影することによって成立するのが「狭義での知覚的特性（perceptual properties in a narrow sense）」であると言える。

以上の説明からも明らかなように、狭義での知覚的特性は感覺的特性のもつアスペクト①と純粹認知的特性との融合体（「トマトのあざやかな赤さ」）としてあると見なされるのであるが、こうした融合体であることによって狭義での知覚的特性はクオリアとともに外界の対象に対する志向性を有することになる（因みに、狭義での知覚的特性は、ゴールドマンの言う「知覚的特性」におおよそ対応するものであると考えられる）。

(2) 広義での知覚的特性

一次的美的特性と狭義での知覚的特性の融合体としてあるのが「広義での知覚的特性（perceptual properties in a wide sense）」であると言えるが、このことを別の角度から捉えるならば、広義での知覚的特性は（二つのアスペクトをともに具えた）感覺的特性と純粹認知的特性との融合体（「トマトの

あざやかな赤さ」）としてあるということになる。したがって当然のことながら、広義での知覚的特性はクオリアと外界の対象に対する志向性の二つをもとに有することになる。

2.3.3 広狭両義での知覚的特性と一次的美的特性との関係

以上の議論を踏まえて、ここでは知覚的特性と一次的美的特性とがいかなる関係にあるかという点をめぐって考察をおこなうことにする。

両特性の関係について考察するにあたっては、知覚的特性一般が大きく「狭義での知覚的特性」と「広義での知覚的特性」に二分されるものであることに応ずるかたちで、狭義での知覚的特性と一次的美的特性との関係と、広義での知覚的特性と一次的美的特性との関係についてそれぞれ別個に論ずることにする。

(1) 狭義での知覚的特性と一次的美的特性との関係

すでに見たように、狭義での知覚的特性は、感覺的特性のもつ「外界から刺激されることで自分に何が起きているか」というアスペクト（アスペクト①）の側から捉えられた感覺的特性を外界に位置する純粹認知対象に投影することによって成立するものであり、その意味で、狭義での知覚的特性はアスペクト①の側から捉えられた感覺的特性と純粹認知的特性との融合体としてあると言える。

一方、一次的美的特性は、感覺的特性のもつもう一方のアスペクト、すなわち「自分がそれ（＝自分の身に起こっていること）をどのように感じているか」というアスペクト（アスペクト②）の側から捉えられた感覺的特性（すなわち「原美的特性」）を外界に位置する純粹認知対象に投影することによって成立するものであり、その意味で、一次的美的特性はアスペクト②の側から捉えられた感覺的特性と純粹認知的特性との融合体としてあると言える。

以上の点を踏まえるならば、狭義での知覚的特性と一次的美的特性との相違は、最終的には、それぞれの特性がその焦点を合わせる感覺的特性のアスペクトの違いに帰着するものと見なされる。すなわち、狭義での知覚的特性が感覺的特性という同一特

性のもつ二つのアスペクトうちとくにアスペクト①に焦点を合わせたものであるのに対し、一次的美的特性はアスペクト②に焦点を合わせたものと言えるのである。

広義での知覚的特性が感覚的特性と純粹認知特性との融合体であることを考えるならば、狭義での知覚的特性が感覚的特性のもつアスペクト①に焦点を合わせた広義での知覚的特性と言えるのに対し、一次的美的特性とは感覚的特性のもつアスペクト②に焦点を合わせた広義での知覚的特性と言え、したがってこの点を踏まえて両者の関係の要諦を示すならば、両者は広義での知覚的特性という同一特性のもつ二つのフェイズ (phase)³⁹⁾と見なされることになる。

(2)広義での知覚的特性と一次的美的特性との関係

すでに見たように、広義での知覚的特性は一次的美的特性と狭義での知覚的特性の融合体としてあるのだが、このことを別の角度から捉え返すならば、広義での知覚的特性はアスペクト①とアスペクト②との両面から捉えられた感覚的特性と純粹認知的特性との融合体としてあるということになる。

一方、一次的美的特性は、上にも見たように、アスペクト②の側から捉えられた感覚的特性と純粹認知的特性との融合体としてあることから、広義での知覚的特性と一次的美的特性との関係は、前者が後者を包摂する関係であると見なされる。

両特性について、それぞれの構成成分に照らしてさらに詳しく見るならば、広義での知覚的特性が感覚的特性全体を含むのに対し、一次的美的特性はあくまでアスペクト②の側から捉えられた感覚的特性のみを含むに過ぎない点に、両者の相違を認めることができる。

この点に鑑みるならば、広義での知覚的特性と一次的美的特性との関係を同一特性のもつ二つのフェイズとして捉え返すことも可能となる。すなわち、広義での知覚的特性が広義での知覚的特性全体のフェイズであるのに対し (これはある意味自明の理であるが)、一次的美的特性はこの広義での知覚的特性のもつ部分的フェイズであると解されるのである。

3 残された問題

以上ハンフリーの感覚・知覚理論に依拠することで、知覚的特性と美的特性との関係について考察を繰り返してきたのであるが、それをとおして得られた一次的美的特性に関するあらたな理解についてひとつの問題提起をおこなうことで、本稿を締めくくりにしたい。

3.1 美的特性投影主義は美的特性準実在論に過ぎないか

ここで注目したいのは投影の機制である。2.2で確認したように、本来外界の対象に対する志向性をもたない原美的特性が外界に位置する純粹認知対象へ投影されることによって、外界の対象に対する志向性を具えた一次的美的特性が成立することになるのであるが、このことから明らかなように、投影の機制は一次的美的特性の成立にあたって必須の契機をなすものと考えられる。この点に鑑みるならば、本稿で提示した一次的美的特性に関する理解は、基本的に「投影主義 (projectivism)」にもとづくものと言える。

そのとき問題となるのは、投影主義にもとづく一次的美的特性に関する理解のもつ存在論上の身分、より具体的に言うならば、美的特性実在論／非実在論上の身分ということになる。

広義での美的特性実在論／非実在論に関しては、それを詳しく見るならば、論者に依拠してさまざまなタイプのものが存在すると言えるが⁴⁰⁾、ここではそれらを大きく美的特性実在論、美的特性非実在論、美的特性準実在論に分類したうえで、まずはそれぞれの基本的スタンスを押さえておくことにしたい。

(1)美的特性実在論 (realism about aesthetic properties)

美的特性実在論とは、美的特性を実在する世界の構成要素に含める、換言するならば、美的特性を世界に帰属しうる特性と見なす立場であると言える。

(2)美的特性非実在論 (non-realism about aesthetic properties)

美的特性非実在論とは、美的特性を実在する世界

の構成要素に含めない、換言するならば、美的特性を世界に帰属しうる特性とは見なさない立場であると言える。

(3)美的特性準実在論 (quasi-realism about aesthetic properties)

美的特性準実在論とは、美的特性は本来実在する世界の構成要素ではなく、あくまで主観に帰属される主観的特性に過ぎないが、それにもかかわらずそうした主観的特性があたかも世界の構成要素であるかのように仮現する (appear) と見なす立場であると言える。

一般的な理解にしたがうならば、美的特性に関する投影主義的理解は、実在論との関係で言うならば、美的特性非実在論とまでは言い切れないものの、美的特性実在論であるとは断じて言えず、せいぜいのところが美的特性準実在論、すなわち本来主観的特性に過ぎない美的特性が、外界に位置する対象に投影されることによって、あたかもそれが外界の対象のもつ実在的特性であるかのように仮現すると見なす立場にとどまるものと考えられる。

この点は、本稿に示した一次的美的特性に関する理解に関しても同断であり、一般的理解にしたがうかぎり、それは美的特性準実在論の一種として位置づけられることになる⁴¹⁾。

それでは、投影主義にもとづく美的特性理論は、美的特性実在論へと通ずる道を完全に閉ざされてしまっているのだろうか。結論から言えば、必ずしもそうとは言いきれない。この点について考えるにあたって、ジョイスがおこなっている、道徳哲学上の投影主義のもつ実在論上の身分に関する考察は大いに示唆に富む (Joyce [2007])。

ジョイスによれば、「傾性 (disposition)」の概念を導入することで、道徳経験に関する投影主義的理解を受入れながらも、道徳的特性を世界の具える特性と見なすことが可能となる。たとえば、ある人物が「その猫を痛めつけることは許されない」と発言するとき、彼のこの発言を「その猫を痛めつけることは、彼のうちにある種の感情的反応 (emotional response) を引き起こす傾性をもつ (あるいは、ジョン・ロックの術語を用いるならば「力能

(power)」をもつ」という主張として解することができ、さらには「その猫を痛めつけることは、ある種の感情的投影 (emotional projection) を引き起こす傾性をもつ」とさえ解しうるのである (Joyce [2007]: 67)。

ジョイスのこの議論を美的特性理論に適用するならば、外界の対象 (もしくは、それに起因する刺激) はある人物にある特定の美的反応を引き起こす「傾性」をもち、かてて加えて、その美的反応を、それを引き起こした外界の対象に投影する「傾性」をもつと見なすことが可能である、ということになる。

美的特性に関するこうした傾性主義的な理解は、あらためて言うまでもなく、それ自体が美的特性実在論のひとつのタイプとして捉えることも可能であり⁴²⁾、ここに美的特性に関する投影主義的理解から美的特性実在論へといたる道が拓かれるのである。

3.2 原美的特性と世界との連関

以上投影主義にもとづく一次的美的特性に関する理解のもつ美的特性実在論／非実在論上の身分について検討を加えてきたのであるが、ついでここでは、原美的特性と世界との連関について考えてみることにしたい。

2.2.1に見たように、感覚的特性は、「外界から刺激されることで自分に何が起きているか」というアスペクト①と「自分がそれ (=自分の身に起こっていること) をどのように感じているか」というアスペクト②という二つのアスペクトを具えるのであるが、原美的特性とは、そのうち後者のアスペクト、すなわちアスペクト②に焦点を当てた感覚的特性を指すものであった。

2.2.2に指摘したように、もとより原美的特性は外界の対象に対する志向性をもたないのであるが、だからといって、それが世界との一切の連関を絶たれているということにはならない。というのも、感覚的特性のもつアスペクト②が「自分に起きていることをどのように感じているか」をその内実とするかぎりにおいて、アスペクト②は「外界から刺激されることで自分に何が起きているか」というアスペ

クト①と少なくとも潜在的には密接不可分な関係にあり⁴³⁾、また、自分の身に生じている事態があくまで外界からの刺激に起因するものであるかぎりにおいて、アспект②は少なくとも間接的には世界との連関を保持すると言えるからである⁴⁴⁾。

以上のことから、アспект②に焦点を当てた感覚的特性である原美的特性は、少なくとも潜在的かつ間接的には世界との連関を保持すると結論づけられることになる。因みに、原美的特性と世界との連関の中核に位置するのは、外界からの刺激と自己との間に成立する感情的な交わり (affective communion) であると考えられる。

* * *

以上の素描風の論述からも予想されるように、われわれに残された課題は、美的特性と世界とはいかに連関しているのかという大枠での問題設定のもとに、投影主義のもつ實在論／非實在論上の身分をあらためて検討することで、本稿に示したハンフリーの感覚・知覚理論に依拠する美的特性に関する理解を、美的特性實在論／非實在論の問題構制のもとであらたに捉え返すことにあると言える（その際、ハンフリーの感覚・知覚理論が投影の機制抜きで再構成可能であるか否かという点に関する検討もあわせてなされることになろう）⁴⁵⁾。

註

- 1) Cf. Sibley [2001], Beardsley [1982], Levinson [1990a], Levinson [1990b], Pettit [1983], Bender [1987], Goldman [2009].
- 2) Reid [1786]: 280-96. なおハンフリー [2004] では、ここで彼が依拠するリードの議論がより詳しく紹介されている (ハンフリー [2004]: 88-90).
- 3) 『赤を見る』の頁数表記中、スラッシュで分けられた前の数字は原著の頁数を、また後の数字は邦訳の頁数をそれぞれ示す。
- 4) 感覚と知覚との関係をめぐる常識的理解に関する

ハンフリーの記述は、一人称的視点からではなく、あくまで三人称的視点からなされたものである点は注意を要する。

- 5) このハンフリーの記述からも見て取れるように、感覚はその本有的な要素 (an intrinsic element) として評価的契機 (evaluative factor) を内含するものと考えられるが、この点は銘記しておく必要がある。
- 6) これら二種の情報を「潜在的に」含んでいるということは、これらの情報が明確な仕方では覚知されていない、換言するならば、それらがいまだ意識化されていないということを意味する。
- 7) 内部受容刺激も含めすべての刺激は、少なくとも意識主体からすれば (意識にとっての) 外部からの刺激、すなわち外界からの刺激ということになる。
- 8) 刺激に関して感覚が潜在的に含む一方の情報について、ハンフリーは進化心理学的な観点からも言及をおこなっているが、そこではこの情報について「何が起きているか (what is happening)」(87/98)、「自分に局在的に何が起きているか (what is happening locally to me)」(92/102) といった記述がなされている。cf. Humphrey [2011]: 44, 46.
- 9) この代替モデルのもとでは、知覚は外界に関する認知機能を有するに過ぎず、それは必ずしもクオリアを帯びるものではないということになる。なおこの点に関しては、1.3.1で指摘する盲視状態におけるクオリアを欠いた知覚を参照のこと。
- 10) 感覚と知覚との関係をめぐる常識的理解に関する記述と同様、この代替モデルに関する記述もまた、一人称的視点からではなく、あくまで三人称的視点からなされたものである点は注意を要する。
- 11) 盲視とは、広義では (とりわけ霊長類において)、一次視覚皮質 (primary visual [striate] cortex) が欠如しているにもかかわらず、視覚が残存している状態を指す。一方

狭義では、視覚皮質に損傷を受けた人が視覚的弁別をおこなえるにもかかわらず、その弁別している刺激が「見えている」とは意識していない状態を指す (cf. アイゼンク [1998]: 435 f.)。盲視は、網膜から上丘、視床丘を経て視覚連合野にいたる、いわゆる第二視覚系 (second visual system) によって成立すると見なすのが今日一般的となっている (cf. 大山、今井、和氣編 [1994]: 212f, グッデイル、ミルナー [2008]: 96-7, ウィルソン、ロバート R.、ケール、フランク C. [2012]: 1288-91)。

- 12) ヘレンに関する詳細な報告は Humphrey [1974] に見られる。
- 13) Brent, Kennard, Ruddock [1994] では、「強制選択」実験 (forced choice experiments) をとおして、左後頭皮質の外傷性障害によって右視野を欠損した患者が、その見えない右視野に提示された色刺激を高い頻度で (意識的知覚なしに) 言語的に同定可能であることが確認された、との報告がなされている。
- 14) 盲視患者に関する詳しい報告はハンフリー [1993]: 70-2を参照のこと。また盲視一般については Weiskrantz [2009]、グッデイル、ミルナー [2008] を参照されたい。
- 15) 感覚と知覚が同一経路上にではなく、両者が相互に独立した別個の経路上に位置づけられることの証左としてハンフリーは、「盲視」という状態を取り上げるのであるが、このことを証拠づけるのは盲視にかぎられるわけではなく、「変形視 (metamorphopsia)」と「視覚的失認症 (visual agnosia)」もまたその有力な証拠となる (52-4/61-2)。

そこでハンフリーの記述をもとに、「盲視」、「変形視」、「視的失認症」それぞれの要点を示すことで、三者相互の関係を明らかにしてみるならば、以下ようになる。

- ①盲視：感覚が発生せず、したがって感覚の意識も生じないが、知覚は保持される。
- ②変形視：感覚に異常をきたし、その結果感覚の意識も正常ではないが、知覚は正常を保つ

(「変形視」について詳しくは、大山、今井、和氣編 [1994]: 215を参照のこと。なおハンフリーは、変形視において知覚は正常を保つとしているが、その論拠は示されていない)。

③視覚的失認症：知覚は機能しなくなったが、感覚も感覚の意識も依然として正常に機能している。たとえば、患者は色の感覚は一切失われていないと報告するにもかかわらず、外界に位置する対象の色をもはや名指す (name) ことができない (視覚的失認症一般については、本田 [1998]: 134-54およびハンフリーズ、リドック [1992] を参照のこと。因みに、「視覚的失認症」の具体例としてハンフリーの挙げる症状は、より精確には「色彩失認 (color agnosia)」にあたるものと見なされる。色彩失認に関しては、大山、今井、和氣編 [1994]: 219r-20f を参照されたい)。

- 16) 視覚的失認症 (visual agnosia) に関する研究をおして明らかとされつつある、認知を可能とする意味論的メカニズムについては、本田 [1998]: 142-54を参照されたい。
- 17) 因みに、ここに言う「身悶え」は、最終的には行動態勢へといたるその端緒をなすものと考えられる。なおこの点については、註(25)もあわせて参照されたい。
- 18) 「反射弓 (reflex arc)」とは、特定の反射に関与する神経経路であり、感覚受容器から発した興奮が求心性神経経路を経て反射中枢 (reflex center) に達し、折り返して遠心性神経経路を下って筋や腺などの効果器に達するまでの全経路を意味する。Cf. 八杉、小関、古谷、日高編 [2005]: 1123f.
- 19) 言うまでもなく、こうした刺激に応じた反応 (身悶え) は感覚モダリティの分化に通ずるその端緒をなすと言える。
- 20) それが意識化されるものではない以上、たとえモダリティ上の差異をとまうものであったにせよ、こうした反応 (身悶え) はいまだ語の正しい意味での「感覚」とは言えないことになる。

- 21) 「受容もしくは拒絶の身悶え」は、「選好 (preference)」の原初の形態であると考えられるが、だとすれば、相互に密接に関連する「快・不快」、「選好」、「評価」という三つの契機のうち、選好がもっとも原初的な反応であると見なされることになる。
- 22) ここに言う「何が起きているか」は、本稿1.2に示したハンプリーによる感覚と知覚との代替モデルにおける、感覚が潜在的に含む一方の情報である「物理的出来事としてその刺激がいかなるものであるか」(50-1/58-9)、あるいはそれをあらためて捉え返したわれわれの理解にしたがうならば、「外界から刺激されることで自分に何が起きているか」に直接対応するものであり、また、「それについて自分がどう感じているか」は、もう一方の情報である「主体がそれについてどう感じているか」(50-1/58-9)に直接対応するものであると考えられる。
- 23) ハンプリーはここで、刺激に対して適切な感覚反応を引き起こすための指令信号をモニターすることによって、「何が起きているか」という点ばかりではなく、「外界からの刺激について自分がどう感じているか」という点に関してもしかるべき情報を得ることができるものと見なしているが、後者に関して言うならば、こうしたモニタリングによるだけではそれはあくまで潜在的なものにととまり、これが顕在化されるには、反応指令信号のモニタリングそれ自体に対するモニタリング、すなわち二階のモニタリングが必要になると考えられる。
- 24) ここに言う「その(外界からの)刺激をもとに外界の状況を再構成すること」こそ、知覚の基本機能であると考えられる。
- 25) 本稿「0 はじめに」でも述べたように、松崎 [2013] では、廣松渉の表情理論を美的特性理論のための基盤に据えることで、あらためて知覚と美的感受との関係を捉え返すことを試み、両者の関係について「広義での知覚は、狭義での知覚としての認知、美的感受、行動態勢の三契機の融合態としてある」という基本命題を導出したのであるが、本文に言う「疑似化(ヴァーチャル化)された身悶え」は、認知、美的感受とならんで広義での知覚を形作る契機としての行動態勢の原初の形態をなすものと考えられる。なお、知覚的特性と美的特性との関係にその考察の焦点を絞る本稿においては、この行動態勢という契機に関する直接的な言及は控えることにしたい。
- 26) 因みにハンプリーの想定では、感覚的活動の私秘化は進化の段階の比較的遅い時期、さらに特定化するならば、ヒトにつながる進化の系統において哺乳類の脳皮質が誕生した時期になってはじめて起こったとされる(94/105)。
- 27) 因みにハンプリーは、本文に掲げたリードの一節をもとに「感覚と知覚の混同は、連合の繰り返し(repeated association)から不可避的に生ずる結果(inevitable consequence)に過ぎない」(60/70)というのがここでのリードの主張であると解釈している。
- 28) ラマチャンドランらの実験は、ハンプリーの感覚・知覚理論に対してコリン・マッギン(McGinn [1992])、ロバート・ヴァン・ギュリック(Van Gulick [2000])、ヴァレリー・ハードキャッスル(Hardcastle [2000])らから寄せられた、場合によってはハンプリーの理論にとって致命的なものともなりかねない批判を斥けるための重要な鍵を与えるものと言える(cf. 59-60/68-69)。
- 29) この実験に関しては、ラマチャンドラン、ロジャース=ラマチャンドラン [2010]:10-3に言及が見られ、またこれに類する実験に関しては、ラマチャンドラン [1999]:94-8で触れられている。
- 30) 被験者の右手に装着されているのは「皮膚コンダクタンス反応(skin conductance response)」測定装置(SCR)である。因みに、皮膚コンダクタンス反応とは、発汗等の作用によって皮膚を流れる電流の抵抗が低くなり、皮膚伝導度が増大することを意味する。人の汗腺は交感神経系によって制御されているた

め、皮膚コンダクタンスは、心理的または生理的覚醒の指標として使用される。

- 31) ベイズ主義的学習理論については、Joyce [2003] : 25-30を参照されたい。
- 32) ラマチャンドランらは同様の趣旨で、とくに【実験 2】、すなわちいわゆる「テーブル実験」について以下のように述べている。

われわれのテーブル実験から、この幻覚はあらゆる知覚の具える「ベイズ主義的な論理 (Bayesian logic)」、すなわち、自己の身体も含む一世界に関する有用な知覚的表象を構成するにあたって、感覚入力における統計的相関性 (statistical correlation) を探知する脳の際立った能力から生ずるという議論が導かれることになる。

(Armel and Ramachandran [2003] : 1449 r-1500l)

- 33) その論考において、ラマチャンドランらがこの投影の機制を重要視していることは、そのタイトル「感覚の外的対象への投影 (projecting sensation to external objects)」からも見て取れよう。
- 34) より具体的に述べるならば、それは640から780 nm の範囲に位置づけられる波長をもった光ということになる。cf.日本色彩学会 [2011] : 12.
- 35) 感覚的特性のアスペクト①、すなわち「外界から刺激されることで自分に何が起きているか」という情報がすなわち「赤さ」であるという説明には納得のゆかない向きもあろうが、この点に関しては、たとえばパトカーの赤色警光灯を間近で見ているような状況、すなわちきわめて光度の高い赤 (赤い光) を目にしている状況を思い描いてみるならば、より合点のゆくものとなろう。
- 36) ここでの論脈では、「あざやかさ」という特性がたんに記述的成分のみならず価値的成分も有する点に注目されたい。あらためて言うまでも

なく、「あざやかさ」という特性は、それが置かれる通常のコンテキストにおいては、正の価値的成分、すなわち「よさ (goodness)」を具えるものと見なされる。

- 37) 本稿1.4に示したハンフリーの進化心理学上の仮説に依拠するならば、感覚的特性は外界からの刺激に対する反応指令信号のモニタリング (意識化) によって成立することになるのだが、感覚的特性のもつ一方のアスペクトであるアスペクト①がこのモニタリング (意識化) 自体によって顕在化するのに対し、他方のアスペクト②は、註(23)における指摘を踏まえるならば、このモニタリング (意識化) によるのではなくあくまで潜在的なものにとどまり、これが顕在化するには、外界からの刺激に対する反応指令信号のモニタリング (意識化) それ自体をさらにモニターすること、換言するならば、二階のモニタリング (意識化の意識化) が必要となる。以上の点を踏まえるならば、原美的特性とはこうした二階のモニタリングをとおして顕在化した感覚のアスペクト②に焦点を当てた感覚的特性に他ならないということになる。
- 38) もとより感覚的特性のアスペクト②は外界の対象に対する志向性をもたないが、「外界から刺激されることで自分に何が起きているか」という感覚的特性のアスペクト①に対しては「反省的 (自己回帰的) 志向性」をもつと考えられる。
- 39) 感覚的特性のもつ二つのアスペクトとの混同を避けるために、ここでは「アスペクト」ではなく「フェイズ」という用語を使用することにするが、同一事象の具える (複数の) 側面もしくは観点を指し示すものであるという点では、「アスペクト」と「フェイズ」という二つの用語は基本的に同義のものと見なされる。
- 40) 美的特性実在論/非実在論の (可能的) 類型については、松崎 [2011] : 109を参照されたい。
- 41) 道徳哲学の分野で、投影主義にもとづく準実在論を唱える代表的な論者にサイモン・ブラックバーンがいるが、彼の議論については Black-

- burn [1984], [1993a], [1993b] を参照されたい。またブラックバーンの準実在論を美的特性論に適用したものとしては、Hopkins [2001], Todd [2004] が挙げられる。Cf. Hopkins [2009].
- 42) 美的特性傾性理論のもつ美的特性実在論としての可能性については、松崎 [2011] を参照されたい。
- 43) 感覚的特性のもつアスペクト①とアスペクト②との関係を註(37)における記述が示唆するところをもとにさらに具体的に捉え返すならば、感覚的特性のもつアスペクト②は、アスペクト①を顕在化する外界からの刺激に対する反応指令信号のモニタリング（意識化）それ自体をさらにモニターすること、換言するならば、二階のモニタリング（意識化の意識化）によって顕在化するものであり、そのかぎりにおいて両者は一階の意識作用と二階の（自己回帰的）意識作用との関係にあると考えられる。
- 44) 『ソウルダスト』においてハンフリーの示唆するところから推断するに（cf. Humphrey [2011]: 46/ハンフリー [2012]: 63）、少なくとも感覚的特性のもつアスペクト①は、もとより外界の対象それ自体に対してではないものの、外界からの刺激に対する志向性をもつものと見なされるが、だとすれば、原美的特性がアスペクト①と潜在的な関係性をもつものであるかぎりにおいて、原美的特性もまた少なくとも潜在的かつ間接的には外界からの刺激に対する志向性をもつと考えられる（なお、こうした外界からの刺激に対する志向性を外界の対象に対する志向性と区別して「前志向性（pre-intentionality）」と名づけることにする）。
- 45) この課題に取り組むにあたっては、道徳実在論をめぐる諸家の議論、とりわけサイモン・ブラックバーンとジョン・マクダウェルとの間で交わされた論争に関する検討がひとつの重要な端緒をなすものと予想される。cf. Blackburn [1984], [1993a], McDowell [1998a], [1998b], [1998c], [1998d].

参考文献

- Armel, K. Carrie and Ramachandran, V. S. [2003]. "Projecting Sensations to External Objects: Evidence from Skin Conductance Response." *Proceedings of the Royal Society of London: Biological Sciences* 270: 1499-1506.
- Beardsley, Monroe C. [1982]. "What Is an Aesthetic Quality?" In *Theoria*: 50-70. Reissued in: Chap. 6 of his *The Aesthetic Point of View: Selected Essays*. Edited by Michael J. Wreen and Donald M. Callen. Ithaca/London: Cornell University Press, 93-110.
- Bender, John W. [1987] "Supervenience and the Justification of Aesthetic Judgments." *Journal of Aesthetics and Art Criticism* 46: 31-40.
- Blackburn, Simon [1984]. *Spreading the Word: Groundings in the Philosophy of Language*. Oxford: Clarendon Press.
- [1993a]. *Essays in Quasi-Realism*. Oxford: Oxford University Press.
- [1993b]. "Realism, Quasi, or Queasy?" In *Reality, Representation, and Projection*. Edited by J. Haldane and C. Wright. Oxford: Oxford University Press, 365-83.
- Brent, P.J, Kennard, C., Ruddock, K.H [1994]. "Residual Colour Vision in a Human Hemianope: Spectral Responses and Colour Discrimination." *Proceedings of the Royal Society of London: Biological Sciences* 256 (1347): 219-25.
- Goldman, Alan H. [1993]. "Realism About Aesthetic Properties." *Journal of Aesthetics and Art Criticism* 51: 31-37.
- [2009]. "Aesthetic Properties." In *A Companion to Aesthetics*. 2nd edn. Edited by Stephen Davies et al. Oxford: Wiley-Blackwell, 124-8.
- Hardcastle, Valerie Gray [2000]. "Hard Things Made Hard." In: Humphrey [2000]: 51-3.
- Hopkins, Robert [2001], "Kant, Quasi-realism,

- and the Autonomy of Aesthetic Judgement." *European Journal of Philosophy* 9: 166-89.
- [2009]. "Objectivity and Realism in Aesthetics." In *A Companion to Aesthetics*. 2nd edn. Edited by Stephen Davies et al. Oxford: Wiley-Blackwell, 444-9.
- Humphrey, Nicholas [1974]. "Vision in a Monkey without Striate Cortex: A Case Study." *Perception* 3: 241-55.
- [1992]. *A History of the Mind: Evolution and the Birth of Consciousness*. New York: Copernicus.
- [2000]. *How to Solve the Mind-Body Problem*. Exeter: Imprint Academic.
- [2006]. *Seeing Red: A Study in Consciousness*. Cambridge/Massachusetts: Harvard University Press.
- [2011]. *Soul Dust: The Magic of Consciousness*. Princeton/Oxford: Princeton University Press.
- Joyce, James [2003]. "Bayes' Theorem." In: *Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Spring 2009 ed.). Edward N. Zalta (ed.), URL = <<http://plato.stanford.edu/entries/bayes-theorem/>>.
- Joyce, Richard [2007]. "Moral Anti-Realism." In: *Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Summer 2009 ed.). Edward N. Zalta (ed.), URL = <<http://plato.stanford.edu/entries/moral-anti-realism/>>.
- Levinson, Jerrold [1990a]. "Aesthetic Uniqueness." *Journal of Aesthetics and Art Criticism* 47 (1980): 435-49. Reissued in: Chapter 6 of his *Music, Art, and Metaphysics: Essays in Philosophical Aesthetics*. Ithaca/London: Cornell University Press, 134-58.
- [1990b]. "Aesthetic Supervenience." *Southern Journal of Philosophy* 22 Supplement (1983): 93-110. Reissued in: Chapter 7 of his *Music, Art, and Metaphysics: Essays in Philosophical Aesthetics*. Ithaca/London: Cornell University Press, 134-58.
- McDowell, John [1998a]. "Are Moral Requirements Hypothetical Imperative?" *Proceedings of the Aristotelian Society*. Supplementary Volume 52 (1978): 13-29. Reissued in: Chapter 4 of his *Mind, Value, and Reality*. Cambridge: Harvard University Press, 77-94.
- [1998b]. "Aesthetic Value, Objectivity, and the Fabric of the World." *Pleasure, Preference, and Value*. Edited by Eva Shaper. Cambridge: Cambridge University Press, 1983, 1-16. Reissued in: Chapter 6 of his *Mind, Value, and Reality*. Cambridge: Harvard University Press, 112-30.
- [1998c]. "Values and Secondary Qualities." *Morality and Objectivity*. Edited by Ted Honderich. London: Routledge and Kegan Paul, 1985. Reissued in: Chapter 7 of his *Mind, Value, and Reality*. Cambridge: Harvard University Press, 131-50.
- [1998d]. "Projection and Truth in Ethics." Presented as a Linley Lecture at the University of Kansas in 1987, and originally published as a pamphlet by the Department of Philosophy, University of Kansas. Reissued in: Chapter 8 of his *Mind, Value, and Reality*. Cambridge: Harvard University Press, 151-66.
- McGinn, Colin [1992]. "Review of 'A History of Mind'." *London Review of Books*. 10 October.
- Pettit, Philip [1983]. "Aesthetic Realism." In *Pleasure, Preference and Value*. Edited by Eva Shaper. Cambridge: Cambridge University Press, 17-38.
- Reid, Thomas [1786]. *Essays on the Intellectual Powers of Man*. Vol.1. Dublin: L. White.
- Sibley, Frank [2001]. "Aesthetic and Non-aesthetic." *The Philosophical Review* 74 (1965): 135-59. Reissued in: *Approach to Aesthetics: Collected Papers on Philosophical Aesthetics*. Edited by John Benson, Betty Redfern and

- Jeremy Roxbee Cox. Oxford/New York: Oxford University Press, 33-51.
- Todd, Cain Samuel [2004]. "Quasi-Realims, Acquaintance, and the Normative Claims of Aesthetic Judgement." *British Journal of Aesthetics*. 44-3: 277-96.
- Van Gulick, Robert [2000]. "Closing the Gap?" In: Humphrey [2000]: 93-7.
- Weiskrantz, Lawrence [2009]. *Blindsight: A Case Study Spanning 35 Years and New Developments*. Oxford/New York: Oxford University Press.
- アイゼンク、M.W.編 [1998]. 『認知心理学事典』野島久雄、重野純、半田智久訳（原著1990年）、新曜社。
- ウィルソン、ロバート R.、ケール、フランク C. [2012]. 『MIT 認知科学大事典』中島秀之監訳（原著1999年）、共立出版。
- 大山正、今井省吾、和気典二編 [1994]. 『新編 感覚・知覚心理学ハンドブック』誠信書房。
- グッデイル、メルヴィン、ミルナー、デイヴィッド [2008]. 『もうひとつの視覚—く見えない視覚—はどのように発見されたか』鈴木光太郎、工藤信雄訳（原著2004年）、新曜社。
- 日本色彩学会編 [2011]. 『新編 色彩科学ハンドブック 第3版』、東京大学出版会。
- ハンフリー、ニコラス [1993]. 『内なる目—意識の進化論』垂水雄二訳（原著1986年）、紀伊國屋書店。
- [2004]. 『喪失と獲得—進化心理学から見た心と体』垂水雄二訳（原著2002年）、紀伊國屋書店。
- [2006]. 『赤を見る—感覚の進化と意識の存在理由』柴田裕之訳、紀伊國屋書店。
- [2012]. 『ソウルダスト—意識—という魅惑の幻想』柴田裕之訳、紀伊國屋書店。
- ハンフリーズ、G.W.、リドック、M.J. [1992]. 『見えているのに見えない?—ある視覚失認症者の世界』河内十郎、能智正博訳（原著1987年）、新曜社。
- 本田仁視 [1998]. 『視覚の謎—症例が明かすく見るしくみ』福村出版。
- 松崎俊之 [2008]. 「青を見る—美的知覚の問題」、『芸術文化』第13号、33-46頁。
- [2010]. 「美的特性に関する階層構造理論」、『芸術文化』第15号、11-32頁。
- [2011]. 「美的特性に関する傾性理論—その美的特性実在論としての可能性を探る」、『石巻専修大学 研究紀要』第22号、109-23頁。
- [2013]. 「知覚的特性と美的特性との関係に関する一考察」、『石巻専修大学 研究紀要』第24号、105-25頁。
- 八杉龍一、小関治男、古谷雅樹、日高敏隆編 [2005]. 『岩波 生物学辞典 第4版』、岩波書店。
- ラマチャンドラン、V. S.、ブレイクスリー、サンドラ [1999]. 『脳のなかの幽霊』山下篤子訳（原著1998年）、角川書店。
- ラマチャンドラン、V. S. [2005]. 『脳のなかの幽霊ふたたび—見えてきた心のしくみ』山下篤子訳（原著2003年）、角川書店。
- ラマチャンドラン、V. S.、ロジャース＝ラマチャンドラン、D. [2010]. 『知覚は幻—ラマチャンドランが語る錯覚の脳科学』北岡明佳作監修、日経サイエンス編集部訳、日経サイエンス社。

本稿は、美学会東部会平成25年度第3回例会における研究発表（2013年9月28日、於北海道大学）にもとづく。